



合戦後、両軍のおびただしい戦死者が葬られた首塚には今も地元の人により手向けられる花が絶えない。岩作(やざこ)・安昌寺(あんしょうじ)旧街道沿い

まいは、まさに四百二十年余の時の流れを感じさせるものがある。地元の人によってか、今も尚、時おり手向けられる花と供物に、武運つたなく戦陣に散った武将達への、鎮魂の想いが伝わってくる。

かつて昭和の三十年代から四十年代初頭頃までは、長久手はのどかな田園地帯であった。そしてまた、古

報が届くのは、岩崎城が陥落し、首実検をしている最中のこと。森長可も同じく後方三好隊の敗戦の報を聞き、急ぎとって返した時には、その前方にはすでに家康の金扇の馬標が富士ヶ根に翻るのを見、岐阜岳に布陣して池田隊の到着を待った。遅れて池田勝入父子も仏ヶ根の高台に進み、右翼に池田之助・輝政の四千の部隊を配し、左翼に森長可の三千の軍を置き、勝入は予備隊二千を率いて正面に布陣。対する徳川方は、本隊として、富士ヶ根から前方の前山に陣を進めた家康隊二千三百と、左翼・仏ヶ根に配した井伊直政隊三千の両隊を家康が指揮、後方の織田信雄の予備隊三千とあわせて、ここに池田・森方、徳川方双方の布陣が完了する。

徳川方・井伊隊の池田隊への攻撃により、仏ヶ根の決戦が始まったのは、午前九時。両軍入り乱れての激しい戦闘の中、形勢は次第に家康方に有利に展開。鬼武蔵と呼ばれ、勇猛果敢でその名を知られた森長可も、五輪の指物に白羅紗の陣羽織を着、月毛の馬に乗って陣頭に立ち獅子奮迅に戦ったが、ついには徳川方の鉄砲の一斉射撃にあい、眉間を打ち抜かれて馬上よりまっさかさまに転げ落ちたと伝えられる(享年二十七歳)。崩れかけた自軍を立て直し、懸命に体勢を整えんと自

らも槍を手に奮戦した池田勝入(恒興)も、味方が壊滅を始めた戦闘の最中、徳川方に討ち取られ、その報を聞き、急ぎ父の元に取って返そうとした息子の之助もついには討たれた(享年二十八歳)。

こうして、最後は池田・森隊の潰走となり、戦いは正午頃終わったと伝えられるが、秀吉のすばやい救援を警戒した家康は、自軍に深追いを避け速やかに小幡城へ返すように厳命、その夕刻には家康自らも小幡城に入場した。同じ日、楽田において三好敗戦の一報を受け、次いで池田父子・森長可の戦死の報を聞いた秀吉は、急きよ兵を集めて長久手方面へ救援に向かったが、途中、家康方が既に戦場を引き上げ、小幡城に入ったことを聞き、翌朝の攻撃を指示したものの、続いてさらに家康が急ぎその小幡城を出て小牧山に帰陣したことを知り、家康の鮮やかな指揮統率ぶりに、改めて敵ながら見事と感心したと伝えられる。

大きく変貌を遂げる古戦場一帯

後年、池田公の子孫によって仏ヶ根の激戦地内、それぞれ終焉の地に建てられた恒興・之助の碑は、今日、周囲一帯が古戦場公園として整備されたその中にあるが、周囲の喧騒を離れた木立の中の静かなたたず

戰場一帯も、沼や繁みにその雰囲気の色濃く残していたが、大都市名古屋の隣接地として、わが国の経済発展と共に次第に都市化の波にのまれ、相次ぐ区画整理により長久手の風景は一変した。大都市・名古屋東部に隣接する当地域は、学園都市・高級住宅地・郊外型商業ゾーンとして、今や大きく変貌を遂げつつある。

その日、軍馬がいななき、両軍の放つ矢や弾丸が激しく飛び交ったであろう古戦場一帯も、今では静かな住宅地と化し、あるいはまたおしゃれなレストランや店舗の並ぶ幹線道路となり、歴史を知らぬ限り、その戦いを想像することは難しい。激戦地、両軍将兵の流した血に染まったという血洗いの池も、今や埋め立てられ、公園にその名を残すのみである。

しかし、そこは間違いなく今から四百二十年余の昔、両軍が入り乱れての激戦を展開した場所そのものなのである。

先人の苦勞が染みだした土地への愛着

土地に対する限らない愛着は、その土地や知名にまつわる歴史を知ることから始まる。かつて幼き日に歴史学者に憧れたこともあった私が、小牧・長久手の戦いの歴史にとりわけ深く興味を持ったのは、当時私の